

## 歴史と文法

町田 是正

今、お手元にプリントがあると思いますが、まず「歴史と文法」と記してあります。耳馴れない言葉かと思えます。歴史学を勉強していく上での約束事、その程度に理解してください。

では、プリントに従い、時間の許す限り話を進めていきます。最初に、「なぜ歴史に魅せられるのか」？変なテーマを載せておきました。皆様がインドへ行かれると、必ず参観したいと思う彫刻群があります。それが、カジユラホ (Kajuraho) の神像です。男神、女神が抱擁し合っている、しかも、豊かな女神を抱いている男神像を目にすることが出来ます。プリントに記しておきましたが、マハシュリー (Mahasri)、これは、ビシユヌ神のお后です。欲こんで、抱きついている像が、目に浮かぶと思います。それから、サラスバティー (Sarasvati)、これも抱きついております。皆様、ご存知のように、マハシュリー、普通「シュリー」は、日本に渡ってきて、吉祥天となって祀られています。「サラスバティー」、これも日本に渡来して、弁財天となって多くの信仰を集めていることは、良く知られているところです。

次にドゥルガー (Durga)。またカーリー (Kali) と書いてあります。この、ドゥルガーというのは、たとえばイ

ンドラ・ガンジー首相（インド統一のために非常に努力した女性の首相）は、このドゥルガーを自分と同一化をして、信仰しておりました。つまり女性解放の立役者になるという女神であります。次にカーリーというのも、インドが長い間、イギリスの植民地支配下にあつた時代、たとえば、「ベンガル州」が、イギリスによつて分割されようとする、その時、女神カーリーを旗印にいたしまして、イギリスの植民地政策反対運動のシンボルとしました。そういう女神です。日本には、「女丈夫」という言葉がありますが、まさに、女丈夫そのものの女神であろうと思います。そこで、先のシュリーとサラスバティー、その他の女神は日本に渡つてきて、多くの信仰を集めております。

ところが、女丈夫と呼ばれ、女性の憧れのシンボルとも思われるドゥルガーと、カーリーという女神はどういう訳か日本に渡つてきておられない。このことが、私が歴史に惹かれる一つなのです。ところで、仏教学とか、インド学を研究されておられる先生方から、それは仏典に出てこないから、漢訳仏典には、ドゥルガーとか、カーリーは出典しないから、わが国では扱っていないんだ、と云われます。そうだなと思いますが、それにしても、これほどまで、憧れのシンボルとまでなっている女神が、なぜ、日本に伝つてこなかったのだらうかなと、不思議でなりません。今、私の最大の関心事であります。これから少し勉強していきたいと思つています。さてカジユラホーに彫られている神像群は、私ども仏教徒が三法印とする、諸行無常・諸法無我・涅槃寂静という世界とは違つた、ヒンドゥー教の愛の世界・性愛の神像群ではありますが、その性愛世界を除いても、どうして女性解放の憧れのシンボルと思われる女神が日本に渡つて来なかつたんだらうかと、不思議でなりません。これから仏教インド学の先生方から教をいただきながら勉強していきたいと思つています。これが一つの例ですが私が歴史に魅せられている一つの理由で、今後も続いていくのではないかと思つています。

次に話を進めて行きます。これからの内容は、本年一年間学生さんと勉強したその講義の三分の二位をまとめたものです。先ず「歴史(学)とは何か」と書いてあります。「歴史」と言いますと、日常親しんでおり、きわめて日常的なものです。「歴史」なんてわかりきった事と言われると思いますが、改めて「歴史」とは何です、歴史学とは何ですか、と訊ねられると、はて、答えに窮するのではないかなと思います。事実学生さんにも尋ねました。ところが誰一人答える学生さんは居りませんでした。改めて聞かれると困るのです。普通、歴史と言つても大きく分けると三つあるように思います。①過去の出来事・経過・事件としての歴史。具体的に一つの話を紹介したいと思います。私の手許に一月十七日の朝日新聞があります。日曜版です。朝日新聞の編集委員、清水勝男氏の記事です。「第二次世界大戦中。ユダヤの難民、そしてユダヤの子どもたちをかくまったスペインの国境に近いルシャボン村が取材されています。第二次世界大戦中ルシャボン村の人々が匿つた人々の中には子ども達が大勢いた。その中にアレクサンドル・ゴロタンテイクという子どもがおりました。(数学の好きな方は、数学のノーベル賞を受賞した幾何学の世界的権威者だと知つていると思います。)このルシャボン村で匿われたおかげで生き延びて世界的な数学の分野を開拓していったという話が出てくるわけです。このゴロタンテイクの父親・母親は共にポーランドのアウシュビッツで殺されています。これは第二次世界大戦中、その悲惨さわまりのない出来事の一つであります。過去の出来事・事件・経過としての、歴史とはこういうものです。過去の出来事・事件としての「歴史」にあたる言葉は英語にはないのでドイツ語で「die Geschichte」と書いておきました。もう一つの例を示せば「一九四一年の十二月八日に太平洋戦争が始まつて、わが国は三百万人という、尊い犠牲を払つて一九四五年八月十五日に降伏をした。これは経過としての歴史になると思います。次に②番目は、探求・叙述としての歴史。そこにヘロドトス「歴史」(ἱστορία・historia)

と書いておきましたが *historia* を直訳しますと、「探求・調査」という意味です。ヘロドトスの「歴史」は、ペルシャ戦争をあつかい有名なマラソン競技の起りになったマラトンの戦などを書いてある歴史です。その「歴史」の第一ページに「ハルカリナツソスのヘロドトスの探求調査した記録が永遠に失われない為にこれを残す」と書いてあります。その中で「調査探究」の語「*historia*」（イストリエ）が使われています。この言葉が語源となり、私どもが「歴史」にあたる外国語として使っています *history*（英）*Historie*（独）*Histoire*（仏）となっています。本来このヒストリーという言葉の語源が調査とか探求ということであるならば、（これは学生さんに是非理解しておいてくださいと云ったところですが）、歴史学とは何か、歴史とは何ですか。尋ねられたならば「それはあるがままの姿を調査探求すること」これが歴史なんだと理解してほしいと、学生さんに言っておきました。それから③番目。歴史意識・歴史観としての歴史です。幾つかの例を示しておきました。例えば中世初頭に生まれ、ヨーロッパ最大の思想家と言われているアウグステイヌスは、まさにローマ帝国の栄光が減びようとし、またローマの国教ともなったキリスト教も減びようとしている現情を憂いたアウグステイヌスが心魂こめて書き上げたものが「神の国」（神国論）という書物です。岩波文庫に翻訳されているので読むことができます。その神の国、神国論の第15巻―22巻にわたって彼の歴史観・歴史意識が述べられています。即ちローマ帝国がゲルマン民族、特にバンダル族の侵入を受けて、ローマの栄光が失われ、この世界が減び去らんとする時に、将来に平和とキリスト教の興隆を願いつつ「神の国と地上の国という二つの世界を描き出して、ゆくゆくは神の摂理に基いて神の国が建設されると」。神の国とは簡単に言えば、ローマ教皇（ローマ法王）に導かれて、建設される平和国家のことです。神の摂理に基いて神の国が建設されることを願いつつ神国論を書き上げた。あきらかにアウグステイヌスの主観に基く理想国家観です。もう一つ例をあげると、

プリントにマルクスの「経済学批判」と記してありますが、ご承知の如く「経済学批判」はもともと経済学書であると同時にマルクスの歴史観の書物でもあります。その中で展開をされている理論（歴史観）はよく知られている内容ですが、この我々の住んでいる社会というのは、人々の働く力、人々が働いて物をつくりだす力、つまり生産力ですが、その生産力こそが歴史を推し進めて行くエネルギーだと、そのように彼は強く主張する。その生産力、それと人々との関係、社会関係との間に矛盾を生じた時に歴史は弁証法的に発展していくのだと、そのように「経済学批判」の中では述べているわけです。つまり唯物史観の理論が展開されています。こうして見てゆきますと、アウグスティヌスにしても、マルクスの経済学批判にしても、その人の世界観、人生観、そういう歴史意識に基いた歴史ではないかなと思います。その人の主観に基づく歴史です。このようにみてきますと、①出来事としての歴史。②探求調査としての歴史。③歴史意識としての歴史、このように三つあるのではないか。この三つを含め考えていただいて、歴史とは一体何なんだろうかと考えていただきたい。学生さん達には、このことを強調しておきました。さて、次に歴史の事実。「事実」とは何なのか。日本の建国を例示しておきました。二月十一日が建国の日となっておりますが、その根拠は一体なんであろうかな。プリントに示してある「日本書紀」にあるわけです。その日本書紀に基いて、明治五年の太政官令によって二月十一日を紀元節にされた。今の学生さんは紀元節という言葉を知りません。二月十一日を紀元節にする決められて、ずーっと戦争が終わるまで建国記念日とされ、それが今、建国記念日となっております。二月十一日を建国記念日とする典拠は、日本書紀に出てくるのです。読んで行きます。「辛酉年ノ春正月ノ庚辰ノ朔二天皇楯原宮ニ即位ス。是歳ヲ天皇ノ元年トス。正妃ヲ尊ビ皇女トシタマフ。」なお神武天皇のことは日本書紀では「神日本磐余彦天皇」そのように書いてあります。さあ二月十一日は何に基いているのか、話を少しさせていただきます。

きます。聖徳太子という方がおられました。飛鳥時代です。聖徳太子は歴史を作ろうと思ひ、「日本紀」という書物を書いたことは知られております。その当時蘇我氏、物部氏いずれも皇位に匹敵する豪族であります。ところが聖徳太子はお前たち、蘇我氏・物部氏。お前たちと我等皇族・天皇家は違うことをなんとしても立証しなかった。何とかして豪族とは違うこと、天皇制を確立して行く上で何がよいか。これは歴史を作るしかないな。そこで日本紀を書くに至るのです。どうしたか、そこに「辛酉」と言う年号があります。織緯説。（聖人御遺文にも二ヶ所出てくると思いますが）、太子は「日本紀」を書くにあたって、中国の革命伝説の織緯説を取り上げて辛酉の年と甲子の年に、この世の中は大変革が起きる。それが織緯説ですね。辛酉の年と甲子の年にこの社会は大変革が起きる。これをとり入れて我が国の建国を考えたわけです。「推古九年（西暦六〇一）の、辛酉の年から一部一二六〇年遡ったその辛酉の年に我が国は建国したんだ」。そのように聖徳太子は日本紀の中で書いたんですね。これがそのまま日本書紀に転載されました。さて、西暦六〇一年です。これから一二六〇年遡ります。この遡った辛酉の年は紀元前六六〇年になります。ご承知の通り、我が国がようやく知られる時代は中国の「魏志倭人伝」が初めてです。三世紀に我が国はようやく邪馬台国という国が出来て国家らしい形が出来たとされています。それよりもまだ八世紀も昔の六六〇年に神武天皇が橿原宮で即位をして、日本は建国したと出ています。プリントをちよつと見ていただきたいと思ひます。「辛酉」これが一二六〇年遡った紀元前六六〇年のことです。「春、正月ノ庚辰ノ朔、」これを今の太陽暦になおしますと、「二月十一日」になります。これが建国記念日となっているわけです。歴史事実ではありません。一二五代か一二六代かの天皇家が続いてきたとされるのですが、初代の神武天皇から崇神天皇に至るまでの十人の天皇方は全く聖徳太子が作り上げた天皇、架空の天皇となるわけです。古事記だとか日本書紀を見ていきますと、天皇十人の

寿命がべらぼうなんです。一二六〇年の間に十人の天皇を入れるわけですから、いずれも一〇〇歳を超すわけです。神武天皇は一三七歳で死んだことになっています。そういうべらぼうな超人天皇の出現したことを聖徳太子は日本紀において操作をしたわけですね。それがそのまま日本書紀に載せられ、なおかつ明治五年には太政官令で紀元節（二月十一日）としたのです。建国記念日に反対する人々の論拠になっています。一体歴史事実とは何か。歪められ、作為された資料に基いて歴史が作られることもあるんだということです。

では続いて、大聖人の御文書の例をあげておきました。読んで行きます。「昭和定本日蓮聖人遺文」「開目抄」を開きますと、三大誓願が出てきます。柱・船・眼目。その三大誓願の一行程前に、「本ト願ヲ立ツ」。この言葉が出てきます。このことに関しては、望月海淑教授と上田本昌教授も取り上げております。特に望月海淑先生は「本ト願ヲ立ツ」について克明に考察をされておりますので参考になると思います。さて、昭和定本で「本ト願ヲ立ツ」となっておりますが昭和五年に発刊された、姉崎正治教授の校正した「日蓮上人文抄」。それは「大願を立てん」となっております。本願ではないのです。それから戦後、兜木正亨先生が校正した「日蓮文集」によりますと「本願を立てん」となっております。それから戦前のものですが、清水先生、中谷先生、守屋先生、鈴木先生によつて編集された「新修略註・日蓮聖人遺文集」を見ていきますと、「大願を立てん」となっております。それから純粹宗字者として有名なたつた室住一妙先生の「開目抄に聞く」には、「本・願を立」となっております。ご承知の通りこの「開目抄」は元々、この身延山久遠寺に所蔵されておったんですが、残念ながら明治八年の大火の時に焼失して、今は原本がありません。今は乾師の写本が残っております。原本がないので「本願」なのか「本ト願」なのか「大願」なのか確かめるすべがありません。その解釈いかんによつては日蓮聖人の宗教理念に関わる問題が生まれてくると思います。昨日も望月

海淑先生が方便品の「本願」は非常に大事なことから注意してくれと力説されておりましたが、私もそのように思います。この「本ト願ヲ立ツ」と読むのか「大願を立てん」と読むのか「本願を立てん」と読むのか、この読み方いかんでは重要な問題になります。「開目抄」全体あるいは方便品の「我本立誓願…」、大聖人十六歳の時の智誓誓願。三十二歳の立教誓願等あわせていきますと、清水先生が「何がなんでも大願を立てんと読むのが本当なんだ」と力説されていますが、私は「本ト願ヲ立ツ」と読んだ方がよいと思うのですがしかし確かめるべきがございません。

この開目抄の原本・写本の問題は歴史事実とは何かという、非常に難しい問題を（本原性批判）提起しているのではないかと思います。

今度は史実の話しをさせていただきます。③番目の天文年間塩尻峠の合戦という例示です。古文書、これは現在湖南村の浜徳蔵さんが持つておられます。（これが甲府、武田信玄の居城です。これが諏訪湖。これが塩尻峠、海拔九八〇m。諏訪湖が七六〇m。甲府から塩尻峠まで七〇kmくらいです。）では読んで行きます。「今十九卯刻於信州塚麿郡塩尻峠一戦之砲頸壹討捕之條神妙之至候天文十七戊申七月十九日。晴信（朱印）波間右近進との」。この右近進という人が戦いで相手の首を一つ討捕ったので、首を持って帰ると信玄から恩賞が与えられるわけです。その証拠として感謝状のようなものが与えられるのです。それが古文書として残されているわけです。古文書を見ますと戦をした当事者が晴信だということがわかり、また、天文十七年七月十九日に塩尻峠で合戦があったことがわかります。でも、古文書では相手が誰なのがわかりません。

次を見ていきましょう。現在諏訪神社に「諏訪神使御頭之日記」というものが残っています。これを見ていきますと、「此年七月十九日ニ西方破悉放火候テ其日武田殿小笠原殿於勝弦（？）一戦候テ武田殿打勝小笠原衆上兵共二千

餘人討死ス」。これはこの年の七月十九日当時信州を治めていた小笠原長時と戦い、小笠原軍は死者千余人を出して負けたと記されています。

次は南都留郡の木立の妙法寺に残されている記録ですが、「此年七月十五日、信州塩尻峠嶺ニ小笠原五千計ニ而御陣被成候ヲ甲州人数朝懸被成候而。小笠原殿人数ヲ打殺被食候……」。これはこの年の七月十五日、信州塩尻峠の峰に小笠原衆五千人を、甲州兵が朝六時に打ちかかり完全に打ち破つたと書いてあります。そこで問題なのですが、先の古文書、諏訪神社に残っているものとは日付が違っております。七月十五日と十九日。それから人数。勝敗についても。同じ出来事をあつかつたにもかかわらず、資料を見ていきますと記録が違っています。という事は私どもが歴史を調べて行く時に注意をしなければいけない事が、一ツ二ツあります。一体歴史というのは何なのか、事實は果たして史実と言えるのかという疑問が生まれてきます。言うまでもなく過去の歴史事實は時間の壁にはばまれてみることが出来ません。したがって残っている資料。この資料という穴を通して壁の向こうの歴史事實をのぞき見るのです。たまたまこの穴に色紙が張られることがあります。そうしますと本当は白く見えておつたのが色紙が貼られているために、赤や黄色に見えてしまつたりするかもしれません。あるいは穴にレンズがはめ込まれていると、大きく見えてしまうかもしれません。歴史事實というのは残された資料に基いて過去に何があつたかを調べて行くわけですが、往々にして資料が作為的に作られたものがあります。たとえば日蓮聖人を大聖人、大聖人とあがめていると、変な伝説も造られてしまうかも知れまん。そういう事から資料がゆがめられていく場合がありますので大いに注意しなければなりません。歴史事實とは、資料をもとに推測をする「仮定の事実」ではないかと、そのように私は理解しています。如何でしょうか。

資料（史料）の批判というのは極めて大事な歴史学の基本的作業です。資料の真純性の批判といいますが、本物か、偽物か、よくよく確かめなければいけないということ。それから先程の開目抄の例にありますが、原本か写本か、これを本原性批判と云います。木立の妙法寺の記録や右近進の古文書のように内容の吟味です。資料として役立つかどうかという吟味。これを来歴性批判と云います。歴史学を勉強して行く上で大事なことです。私自身が強く反省しているところです。

最後になりましたが「歴史の見方」です。例えば皆様がエジプトに旅行したとします。エジプトの観光地へ行つて必ず見せられるのがピラミッドです。クフ王のピラミッドは高さ百五十m、一個約二tの重さの石を二百五十万個積み重ねたピラミッド。このピラミッドを正面から見ると三角形。真上から見ると正四角形。同じ物でありながら、見る場所を変えると全く違う形に見えるということ。これは学問の世界にもあてはまることです。富士山でも、富士宮から見ると羽田から飛行機に乗って上空から見るとでは同じ形には見えません。同じ物でも見方によつて違うんだということ。歴史の観方もそうです。よい例ではありませんが、例えば「立正安国論」の六番目の問答に「所詮、天下泰平国土安穩ハ君臣ノ楽フ所、土民ノ思フ所ナリ。先ツ国家ヲ祈リテ、須フラ仏法ヲ立ツベシ。」これは問者としての言葉です。余りに「先ツ国家ヲ祈リテ」の語を強調しますと、大聖人が国家主義者となりかねません。しかし、立正安国論における大聖人の聖意は、「汝早ク信仰ノ寸心ヲ改メテ速ニ実乗ノ一善ニ帰セヨ。然レバ則三界ハ皆仏国ナリ。」と正法を立てて安国を願うことこそ大聖人の本意であつたと思えます。このように立場を変えますと、大聖人の歴史像がゆがめられてしまう恐れがあるわけです。同じ大聖人を見る場合にもこのように非常に注意しなければならぬところがあります。その一つの例としてそこにマックス・ヴェーバーとトニーの例をあげておき

ました。近代ヨーロッパの資本主義精神の誕生を促した要素としてプロテスタンティズムが大きく働いているという学説があります。これは今では定説になっております。プロテスタンティズムが大きく働いている学説。これは事実なのですが、これを巡って幾つかの観方があるわけです。そこでマックス・ヴェーバーはプロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神 (die Protestantisch Ethik und der Geist des Kapitalismus (1905)) の中で次のように述べています。「カルヴィニズムの禁欲的宗教倫理が職業聖召観を呼び覚ます源泉となり、世俗内的勤労を積極的に肯定し、それに倫理的徳目を賦与することで、資本主義の精神を誕み出す要因となった。」とヴェーバーは主張するのです。この世の中に大勢の人がいるけれども誰に神の救いの手が差し伸べられているかは解らない。そこで予定説という教えが取り入れられ、この予定説に基いて一生懸命に働くことによって神の思し召しにかなって救われるとします。その懸命に働くことが資本主義の精神を誕み出す要因になったというのが、マックス・ヴェーバーの考え方です。

又違う見方の例としてトニーニーは『宗教と資本主義の興隆』(Religion and the rise of capitalism (1939)) の中で「スペインの無敵艦隊を撃滅、ピューリタン革命、あるいは名譽革命を成功させた、その一百年間、政治・経済・宗教の三方面の再建途上、その三つが相互に関係して、その間に清教主義が大きな役割を持って社会秩序を形成し、イギリスの資本主義の成立を促す大きな要因になった」と。先のヴェーバーのように徳にエートスに焦点をあわせたのではなく、政治経済宗教その三つが絡み合って資本主義が形成されて行ったという見方をしている。資本主義精神の誕生、興隆という問題でも、研究志向(立場)が違えば、観方が違ってきます。学問の世界では大事なことで、立場・観方が違うからこそ学問の進歩があるわけです。

最終講義（町田）

まだ歴史学の諸問題（歴史学の發達。現代における主要史觀。歴史学と隣接諸科学。史学史—西洋、インド、中國、日本—）を残しましたが、持ち時間が無くなりましたので省略させていただきます。長時間の聴聞、ありがとうございました。